東洋経済新報社と石橋湛山 —— ジャーナリストとしての石橋湛山

2025 年 6 月 3 日　駒橋

(1) 生い立ちと年代分け

1. 幼少期～山梨時代
   - 明治 17(1884)年)9 月 25 日、東京生まれ、父・杉田湛誓(日蓮宗僧侶⇒身延山久遠寺第 81 世法主)、宗教界の習いで母方の姓、山梨県増穂村昌福寺の住職就任で翌年甲府へ、長遠寺で成長
   - 2 年飛び級で山梨県立第一中学(現・甲府一高)入学、2 回落第、5 年生のとき大島正健校長(札幌農学校1期生)に出会い、クラーク博士の話や自由主義・個人主義にふれ改心
2. 学生時代
   - 第一高等学校を 2 度不合格、明治 36(1903)年に早稲田大学高等予科入学、文学部哲学科を主席で卒業、宗教研究科(大学院)を明治 41(1908)年卒
   - 田中王堂教授の指導　⇒プラグマティズム、個人主義、自由主義を学ぶ
3. ジャーナリスト時代
   - もともと宗教家か教育者を希望、文筆業に関心　⇒東京毎日新聞社　⇒一年志願兵として入隊
   - 田中穂積早大教授の紹介、明治 44(1911)年、27 歳で東洋経済新報社に入社
   - 大正 13(1924)年、40 歳で第5代主幹・専務取締役(会社トップ)就任、1941 年に社長制
4. 政治家時代
   - 昭和 21(1946)年 4 月総選挙落選、吉田茂内閣大蔵大臣、翌年 5 月公職追放
   - 昭和 31(1956)年 12 月自由民主党第2代総裁、内閣総理大臣就任、風邪で倒れ辞任、65 日政権
   - 昭和 34(1959)年 9 月、周恩来の招待で訪中、共同声明(上海コミュニケ)発表、国交回復に先鞭
5. その後
   - 昭和 38(1963)年 11 月落選(大蔵大臣・議員生活約 13 年)、日中米ソ平和同盟を提唱
   - 昭和 48(1973)年 4 月逝去、享年 88 歳

(2) 東洋経済新報社の成り立ち

○ 明治 28 年(1985 年)11 月設立
- 創業者: 町田忠治　＝　秋田出身、東大法科卒、「朝野新聞」「郵便報知新聞」
- 1893 年:米欧を 10 カ月外遊、特にロンドンで「ロンドンエコノミスト」「スタチスト」2大経済誌が経済界に絶大な信用と権威を持つことに感銘、日本にも同様の経済雑誌が必要と痛感
- 帰国後独立、32 歳で『東洋経済新報』創刊(旬刊)、後発経済誌ながら財界人の支援でスタート
- 創刊の辞　⇒自由(貿易)主義・反保護主義、批判精神の宣言

> 「健全なる経済社会は健全なる個人の発展に待たさるへからす」
> 「誰か能く政府の監督者となり忠告者と成り苦諫者となりて、国家的実業の発展を謀り実業的政策の正鵠を得せしむるものぞ」「今誠に欠くへからざるものは実業家への親切なる忠告者なり、着実なる訓戒者なり、高識にして迂遠ならさる先導者なり」

- 時代背景: 日清戦争の終結=八幡製鉄所建設　⇒近代資本主義経済の発展とともに生きる
  ⇒今年で創業 130 周年:　現在の企業理念「健全なる経済社会の発展に貢献する」に継承
- 町田は創刊1年で退社して日銀へ転職、銀行家の後に衆議院議員・大臣、立憲民政党総裁
- 第2代主幹・天野為之(早大経済学教授)、第3代・植松孝昭、第4代・三浦銕太郎

(3) ジャーナリストとしての活躍

○ 最初は『東洋時論』編集部に配属　(社会・文明評論の総合月刊誌)
- 文芸の自然主義、思想界の自由主義・個人主義を反映、反藩閥・反官僚・反軍閥の急先鋒
- 「愚なるかな神宮建設の議」 大正元年 9 月号　⇒ノーベル賞並みの「明治賞金」を作れ
- 植松逝去で廃刊、『東洋経済新報』編集部へ異動　⇒経済の勉強開始、通勤の市電で原書講読

○ 大正デモクラシーを牽引　＝「民衆主義」実現には自由主義的な政治が必要
- 普通選挙の実施を提唱、普通選挙期成同盟会に参加、示威運動実行委員としてのデモ行進指導
- 吉野作造(東大教授)の「民本主義」が有名だが、三浦・石橋が最も過激で大正デモクラシーをリード　⇒普選法は大正 14 年に成立、その後も婦人参政権や労働組合公認を主張

○ 大日本主義に対し、小日本主義を主張　＝幅広く多くのテーマを扱っているが、特に有名な議論
- 時代背景＝　日露戦争後、第1次世界大戦後の方向性、国家戦略をどうするか？
- 政府と世論の大勢は大日本主義　⇒帝国主義・領土拡張主義・軍国主義、さらに満州へ

- **小日本主義** ⇒軍拡による財政負担と重税、軍閥権力の横暴で、国民は苦しい。それより、欧米列強との経済競争に向けて、平和主義・門戸開放・産業主義・商工立国を目指すべき
  - 「満州放棄論」を主張 vs.「20 万将兵の血と 20 億円の戦費であがなった満州」は手放せない
  - イギリスでも「大英国主義」対「小英国主義」の論争、植民地経営の負担をどうするか？
  - 初めは三浦が主導、「東洋経済」以外での主張は若干のみ、湛山が深化させる
- 湛山の最も有名な2つの論文 ＝ワシントン会議への提言、海軍軍縮や中国の門戸開放が議題
  - **「一切を棄つるの覚悟」** 大正 10(1921)年 7 月 23 日号社説
  - **「大日本主義の幻想」** 同 7 月 30 日・8 月 6 日・13 日号 ＝「棄つる」への想定反論に反論
- 湛山の主張のポイント
  - ① 経済面：朝鮮・台湾・関東州との貿易額は小さい、むしろ米国・印度の方が質量ともに重要、中国とは干渉政策が貿易の障害になっている。植民地の経済的効果は高くない
  - ② 国防面：国防の垣根として海外領土を確保しようとするから軍備負担が増える。その垣根こそ最も危険な燃え草ある。日本が支那に野心を示すからこそ、列強も負けてられないと手をだす
  - ③ 人口問題：植民地等に住む内地人は 80 万人以下。内地の人口は 6000 万人で、人口問題のはけ口にはならない。移民しても底辺労働者で苦労しているだけ
  - ④ 民族自決論：文明の発達に伴い、今後は異民族や異国民を併合・支配することはできない。世界で独立運動が沸き起こる。日本が植民地を棄てても、他国が自主権を妨げることはできない
  - ⑤ 道徳的な支持：植民地に執着し、異民族から仇敵視されるぐらいなら、どうせ棄てる運命にあるものは早く棄てた方が賢明だ。世界の弱小国から道徳的に尊敬され、逆に列強は困るだろう
  - ⑥ 国家戦略論：小国土に縮こまっていろという意味ではない。むしろ活躍の場を世界に広げるための策である。移民を送り込むのではなく、資本を外国に投資して利益を得る。それには軍事費の半分でも平和的な学問技術の研究や産業の進歩に注ぐ必要がある
- 要するに、数字をあげて植民地は「経済的に割に合わない」、時代の潮流を先読みしている
  - あの時代に、こんなことを主張した言論人がいたのか、救われる気持ち
- 戦後、「空論であったかもしれないが、非実効的ではない」 ⇒戦後の軽武装・貿易立国につながる

○ 満洲事変以後、厳しくなる言論統制下の生き残り策
- 細かな記事差止事項の通達、警告・注意・削除・発禁処分 ⇒正面からの批判は許されない
  - 行間に主張をにじませる ⇒「戦時下ではやむを得ないが、運用を間違えると逆効果」
- 政府・情報局の圧力＝石橋の辞任を要求 ⇒社内に動揺が起き、一部から石橋退陣要求騒動
  - 「伝統も主義も捨て、軍部に迎合して残っても無意味。いっそ自爆して滅びた方が世のため」
- 用紙・インク等の配給統制 ⇒昭和 20 年には書籍なし、「会社四季報」休刊、週刊誌は 8 頁
- ただし、大新聞に比べ小部数で政治的影響は小、経済界や官僚・軍部には一定の支持層

○ 昭和 20 年 4 月、秋田県横手に疎開、買収した地元の印刷会社で週刊誌を継続 ⇒終戦へ
- 空襲被害で多くの週刊誌は月刊化や休刊。湛山の先見の明と早めの決断・実行が奏功
- 終戦の翌日、**「更生日本の門出、前途は実に洋々たり」** 社論執筆 ⇒独りだけ前向き・楽観
- 『石橋湛山日記』 1945 年 8 月 18 日

> 考へて見るに、予は或意味に於て、日本の真の発展の為めに、米英等と共に日本内部の悪逆と戦ってゐたのであった。今回の敗戦が何等予に悲みをもたらさゞる所以である。

(4) 湛山の思想とは

○ 自由主義、個人主義、民主主義、平和主義 ＝反イデオロギー、反統制
- クラーク博士(大島正健)、田中王堂、二宮尊徳、福沢諭吉らの影響、日蓮宗の教え
- 封建的因習との戦い、自分の頭で考えろ、人の意見も聞く ⇒独立自尊
- 「和して同ぜず、是民主主義の真髄なり」、同調圧力への反発

○ 功利主義(プラグマティズム)、現実主義
- **「先ず功利主義者たれ」** 大正 4(1915)年 5 月 25 日号社説 ⇒対華 21 カ条要求への批判
  - まず自分の利益を考え、相手の利益も考え、歩み寄る。Win-Win の関係が大事
- 福沢諭吉＝論説を書く時は「自分が担当大臣として、できることを主張しろ」 ⇒社員にも強調
- 理想あっての現実主義、理想を忘れない ＝言論統制への現実的対応

○ 結局、湛山はどういう人だったか
- 反骨精神、合理的思考、理詰めの記事、戦争も植民地も「割に合わない」、実践主義・行動的
- 楽観的、自分の信じる主張は曲げない、頑固、言うべきことは言う⇒追放、「心臓大臣」

（5） 今なぜ石橋湛山が注目されるか

- 先見の明、時代を読む力に優れていた。勉強家で体系的な政策構想力があった ⇒今の政治家？
- 現代は米中対立、ウクライナ戦争など、国際秩序が崩壊の危機 ＝1920～30 年代、湛山がジャーナリストとして最も活躍した時代と似ている ⇒その時、湛山は何を言ったか。そこから何を学ぶか

＜論文抄訳（現代語訳）＞

●「愚なるかな神宮建設の議」 大正元（1912）年 9 月号

多くの人は、明治時代の最大特色は帝国主義的発展であるというかも知れない。しかし、国民は軍事費の圧迫に青息吐息である。明治年代の最大事業は、五箇条の御誓文に始まるデモクラシーの発展、政治・法律等の近代的制度の整備である。

阪谷東京市長は明治神宮の建設に奔走し、世間の賞賛を博しているが、何とそのように小さい考えなのか。東京の地に一つの神社ぐらいを立てたぐらいで、先帝陛下とその時代を記念できると思っているのか。どうして世界の人心の奥底に明治神宮を打ち立てることを考えないのか。真に先帝とその時代を記念するならば、先帝陛下の打ち立てられた事業の完成を考えなければならない。

それでも何か形を具えた物を残したいなら、「明治賞金」を作れと薦めたい。ダイナマイトの発明者ノーベルは、その資産を世界文明のための賞金として遺した。一介の科学者でありながら、永遠に世界の人心に記念される人になった。いわんや、東西文明接触の時期に際して、その接触点である日本の元首であった陛下の記念として「明治賞金」を設ければ、世界の人心を新たにし、世界の平和、文明に貢献する力は計り知れない。それこそが陛下の御意志とも最も合致するであろう。

●「先ず功利主義者たれ」 大正 4（1915）年 5 月 25 日号社説

私はいわゆる人道という言葉は嫌いである。人間でも恩を押し売りする者にろくな奴はいない。多くは偽善者である。恩恵という言葉も嫌だ。最も進歩の遅れた国際外交では、各国ともいまだにこの狼流の態度をとるが、他人は他人、自分は自分である。いかに恩恵を与えようとしても、相手がそれを信用せず、受け取ってくれなければそれまでである。

唯一の道は功利一点張りで行くことである。自己の利益を基本とすれば、自ずと相手の利益も考えなければならない。相手の感情も尊重しなければならない。商人は儲けるために、決して取引相手の感情を損なったりしない。相手が損することを願わない。取引相手が自分に好感情を持ち、豊かに反映することがいずれ自分の利益になることを知っている。相手の繁栄を願うのは、ただ功利を考えるからだ。国際関係も同じである。功利の立場をはっきりさせることで、自国と相手国は十分に理解し合い、信用し合うことができ、感情の行き違いから衝突が生じるような危険は避けることができる。

●「一切を棄つるの覚悟 太平洋会議に対する我態度」 大正 10（1921）年 7 月 23 日号社説

わが国のすべての禍根は、小欲に囚われていることだ。志が小さい。古来の大思想家たちも、無欲が説いたわけではない。大欲を満たすために、小欲を棄てよと教えたのである。しかし、わが国民にはその大欲がない。朝鮮、台湾、中国、満州、シベリア、樺太など、少しばかりの土地や財産に目を奪われ、全世界に目を向けた戦略を立てる余裕がない。

たとえば、満州を棄てる、山東を棄てる。中国がわが国から蒙っていると感じている一切の圧迫を棄てる。また朝鮮、台湾に自由を与える。その結果はどうなるか。英国も米国も大変な苦境に陥るだろう。なぜなら、日本だけが自由主義の対外政策を実行すれば、両国とも世界の規範たる地位を保つことができなくなるからである。その時には、中国をはじめ世界の弱小諸国は一斉にわが国を信頼し、謝意を表すであろう。

このような覚悟を持って会議に臨めば、英米は少し待って欲しいと懇願するだろう。ここに「身を棄ててこそ」の面白みがある。遅きに失したとはいえども、この覚悟を決めれば我が国は救われる。それが唯一の道である。同時に、我が国の国際的地位を守勢から攻勢に転じさせてくれる。

●「大日本主義の幻想」 大正 10（1921）年 7 月 30 日・8 月 6 日・13 日号

前号の私の主張に反対する者は、その理由として次の 2 点を指摘するだろうと思う。

（1）我が国は、これらの地域をしっかり抑えておかねば、経済的、国防的に自立できない。それを脅かされる恐れがある。（2）列強国はいずれも海外に広大な植民地を持っているか、米国のように領土が広大である。にもかかわらず、列強は広大で資源豊富な土地に障壁を設けている。日本だけ海外領土や勢力範囲を棄てよという

のは不公平である。

私は、この反論に対し、次のように応える。第1の反論は幻想、第2は小欲に囚われ、大欲を遂げる方法を知らない者の主張である。

経済的利益を貿易でみると、大正9年の朝鮮・台湾・関東州との輸出入額は9.1億円。これに対し、米国は14.3億円、インドは5.8億円、英国でさえ3.3億円である。即ち、米国が最大の経済的関係にあり、印度や英国もわが国の経済的自立に欠かせない国である。また貿易の内容も、わが国の工業で最も重要な原料は綿花だが、それは印度と米国から来る。朝鮮・台湾・関東州に供給を仰ぐものは一つもない。中国やシベリアへの干渉政策は両国民の反感を買い、貿易の増加は米国に比べて3分の1しかなく、経済発展の障害になっている。

朝鮮・台湾・樺太などをわが国の領土や勢力範囲としておくことが、国防上必要だという主張は間違いである。これらを確保しておこうとするからこそ、国防が必要になるのである。これらは軍備を必要とする原因であって、軍備の必要から起こった結果ではない。多くの人々が、この原因と結果を取り違えて、これらがわが国の国防の垣根であるというが、その垣根こそが最も危険な燃え草である。垣根を棄てるなら、国防も用がない。それを取る国が現れても、わが国が経済的にも執着する必要がないのなら、いいではないか。

いかなる国も、支那人から支那を奪い、朝鮮人から朝鮮を奪うことはできない。日本に武力があったからこそ、支那は列強の分割を免れたという人もいるが、今は日本がわが物顔で振る舞い、支那に野心をもつと見えるから、列強も負けてはいられずと、支那ないし極東をうかがうのである。

また、人口問題の解決に海外領土が役立つだろうと主張する人が多い。しかし、実際の数字を示すと、大正7年末の台湾・朝鮮・満州・樺太・支那本部に住む内地人は80万人に満たない。これに対し、内地の人口は6000万人。日露戦争当時から13年で945万人増であり、外地の80万人はその8.6%に過ぎない。しかも、当地の経済はそれほど成長してはいない。

国土膨張に憧れる人々がいうように、大日本主義が非常な利益があると想像しよう。だが、それは長くは続かない。今や、如何なる地域にも文明の空気は侵入し、その住民に主張すべき権利を教える。今後は新たに異民族や異国民を併合・支配することはできないのは勿論、過去に併合したものも解放し、独立または自治を与える外ないことになるだろう。アイルランドはすでにそうなり、印度で今日の状況がいつまで続くかは疑問である。独りわが国が朝鮮・台湾を永遠に保持し、支那や露国に対して自主権を妨げることができるだろうか。

大日本主義は長く維持し得ぬのである。これに執着し、四隣の異民族異国民に仇敵視されるよりは、どうせ棄てねばならぬ運命にあるならば、早くこれを棄てるが賢明である。早く日本が自由解放の政策に出るならば、彼らは必ず日本を盟主とし、長く親密を続けるであろう。

私が大日本主義を棄てよと主張するのは、決して小日本の国土に縮こまっていろという意味ではない。むしろ世界をわが国土として、活躍の場を世界大に広げるための策である。人道のためなどという立派なことではなく、自国の利益のため、海外領土を解放し、諸民族に自由を与える政策で、列強国の急先鋒となるのが得策なのである。他人には構わず、己れがまず実行する。ここに初めて道徳の威力は現るる。

それでも米国のように広大な国は、他国の者を入れぬかも知れないというだろう。それは移民の話であって、商人には何の妨げはない。労働者を移民として外国に送り出し、低度の生活を強いることは利益でも名誉でもない。そんなことより、資本さえあれば外国に投資して、生産利益を受けられる。だが、問題はその資本がわが国にあるのかである。いわば資本はぼた餅で、土地は重箱。ぼた餅がたくさんできれば、重箱は喜んで貸してもらえる。資本を豊富にするには、平和主義により学問技術の研究と産業の進歩に国民の全力を注ぐ。兵営の代わりに学校を建て、軍艦の代わりに工場を建てる。軍事費の半分を平和的事業に投ずれば、日本の産業の面目を一変する。

朝鮮、台湾、樺太、満州など僅かばかりの土地を放棄することで、より広大な中国の全土を私たちの友として、さらに東洋全体を、世界の弱小国全体を、わが国の道徳的支持者とすることができれば、どれほどの利益であるか知れない。

●「更生日本の門出、前途は実に洋々たり」 昭和20(1945)年8月25日号 社論

余りの急変に呆然自失せる者もあろう。だが、わが日本の前途を悲観する如きは、従来国民に与えられた教養不足のためで、無理もない。わが国は、なるほど従来の領土のある部分を失い、軍備産業等にも制限を受けざるを得ない。しかし、これらが生々発展しようとする日本国民にとって何ほどの妨げをなそう。

言うまでもなく、日本国民は将来の戦争を望む者ではない。それどころか今後の日本は世界平和の戦士としてその全力を尽さねばならぬ。ここにこそ更生日本の使命はあり、またかくてこそ偉大なる更生日本は建設されるであろう。竹槍こそ最も善き武器なりとする非科学的精神が、今回の戦争の不利を招いた根本原因だが、平和の事業においても同様である。単に物質的の意味でない科学精神に徹底せよ。然らば即ち如何なる悪条件の下にも、更生日本の前途は洋々たるものあること必然だ。記して以て更生日本の門出を祝す辞となす次第である。